

## 2. 日本で流布した中国由来の相書



### ① <sup>しんそうぜんぺんせいぎ</sup>神相全編正義 / <sup>ちんたん えんちゆうてつ せきりゆうし</sup>陳搏・袁忠徹・石龍子 (国文学研究資料館蔵 ヤ5-483-1~3)

明版・清版の『神相全編』は10冊の大部なものだが、日本のものはこれに限らず3冊程度の簡約になったものが多い。<sup>けいあんぺん</sup>慶安版(4-②)に対してこれは<sup>ぶんかねんかん</sup>文化年間の刊になる。<sup>ぜんぺん</sup>前版の<sup>ごびゆう</sup>誤謬を改めるほか、医学に連なる人命に関わるものであるとあって、読み間違いを防ぐために、「<sup>ぼう</sup>貌」字の略体「<sup>見</sup>見」を「<sup>貞</sup>貞」に、「<sup>光</sup>光」を「<sup>尙</sup>尙」にするなど、わざわざ<sup>こじ</sup>古字を使用し、漢字の読み方でも<sup>ごおん</sup>呉音を踏襲するなど、表記上でも注目すべき点が多い。<sup>にんそう</sup>人相の絵は、<sup>ごひやくらかん</sup>五百羅漢の<sup>ぶく</sup>51幅を<sup>ほけきょう</sup>法華経の文字だけで描いた絵で著名な<sup>かとうのぶきよ せんじん</sup>加藤信清(遠塵斎)が新たに書き起こしている。



② 秀雅百人一首 / 緑亭川柳 (天明7年(1787)-安政5年(1858))、葛飾北斎等画 [当該箇所は一勇斎(歌川)国芳画]

(国文学研究資料館蔵 ナ 2-194)

緑亭川柳(天明7年(1787)-安政5年(1858))の撰、葛飾北斎(宝暦10年(1760)-嘉永2年(1849))柳川重信、  
 溪斎英泉、一陽斎豊国たち5名の絵師が腕をふるう。当該画像は一勇斎(歌川)国芳画。弘化5年刊行。祝  
 部清風から中江藤樹(慶長13年(1608)-慶安元年(1648))まで百首。上段には各人についての略伝を掲載す  
 るが、千利休の絵は通常の絵と異なり、いかにも俗っぽい姿をしている。これは、肖像画家は観相をた  
 しなむべしという中国古来の言を如実に反映した絵といえる。参考までに『神相全編』の「俗相」と比べ  
 ていただきたい。

千の利休はじめは与四郎と云十七  
 才より道陳に随つて茶を学び名  
 を宗易といふ 茶の道とせる歌に  
 花を見て待らん人に山里の  
 雪間の草の春を見せばや

此心をもつてすといへり 扱茶器のこと  
 は東山殿古器古画を好み給ふより  
 價たかくなり又豊太閤の一奇器に  
 して國郡も与ふべき功臣に千金の  
 器物を給はりて人心を結ん為の謀事  
 なるに治世に成りても茶をするもの  
 奢にふけり金銀を費し得がたき道  
 具を求め或は其業ならぬ人も監  
 定にことよせこれをもて利をむさ  
 ぼるなど心さまよからぬ人も有古器は  
 貴きものと心得價のたかき器をあ  
 するは心利欲に走るがゆへ也缺たる  
 すり鉢にても時の間にあふを茶道  
 の本意とすとこの歌をよめり

『秀雅百人一首』



歌の翻刻

釜一つ 持てば  
 茶の湯 はなるもの  
 よろづの 道具  
 好む はかなさ

本来は釜一つの道具だけで成り立つ、質素な茶の湯の道を理想と目指しながらも、現実には様々な道具好みに大金を費やすマネーゲームを演出せざるを得なかった自分自身を空しく儂いものと嘆いている。

